EDGE

Report from the EDGE

Vol.6
2004.9.10

ディスレクシア (Dyslexia) とは……
知的に問題がなく、聴覚、視覚の知覚的機能は正常なのに、
読み書きに関して特徴のあるつまずきや学習の困難を示す症状のことをいいます。
EDGE は……
ディスレクシアの正しい認識の普及と教育的な支援を目的とした特定非営利活動法人 (NPO) として、
2001 年 10 月に認証・設立され、活動しています。

パーソナル・ストーリー No.5

あの憧れのリチャード・ブランソン卿にお目に掛かりました。

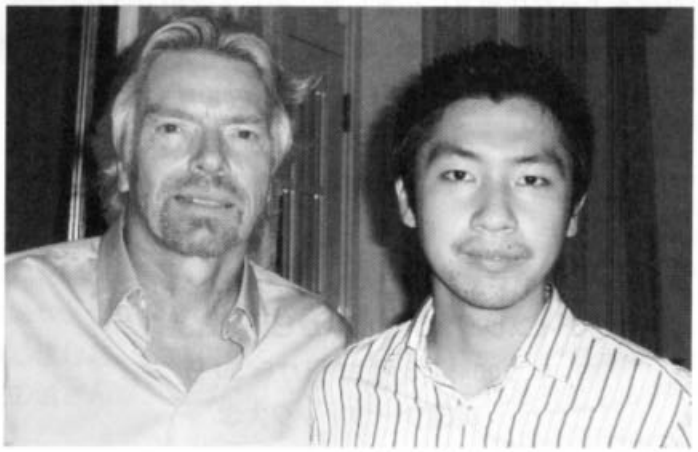
リチャード・ブランソン氏はヴァージン・グループ 150 社以上の長として知られています。また、ご本人がディスレクシアであることを堂々と表明して英国のブレア首相が提唱する識字促進運動に協力をしています。今回は在日英国商工会議所と社団法人日英協会が共催したパーティーで短時間だけでしたがお話しをすることが出来ました。彼を知る参加者からは「珍しく襟のあるシャツを着ているな」と言われるほど普段は気楽な格好で仕事をしているようです。エッジの活動についてお話したところ「大変良いことをしているね」と励まされました。

「母に鍛えられた問題解決力」

小さい頃から母親は勉強と言うよりは体を使ったチャレンジを彼に課しました。12 歳にもならない彼に住所も良く知らない 80 キロも離れたところに住む親戚の家に 1 人で自転車で行かせたこともありました。翌日の帰りには得もいえぬ達成感と自信が着いたそうです。

「17 歳のとき 4 ポンドのカンパを元手に活動を始めた」

今日の成功の元にはステファン・ホーキンズの本を読んだ 99 歳の祖母からの「人生は一度しかないのだから、思いっきりやりなさい」という言葉があります。



英国大使館にてブランソン卿と

怠けてなんかない！

ディスレクシア ―読む・書く・記憶するのが困難なＬＤの子どもたち。

10人の親子のインタビューを通してディスレクシア克服への道のりと生き方を模索する姿を紹介。ひと言ひと言に胸がしめつけられるが、希望をもてたときの晴れやかさは格別だ。専門機関での研究や教育・治療の現場も徹底取材。

上野一彦氏
（東京学芸大学副学長・日本ＬＤ学会会長）
すいせん！

品川裕香◎著

※四六版
ソフトカバー256頁
本体1,300円（税別）

ADHDへの理解を深める絵本

オチツケ オチツケ こうた オチツケ

―こうたはADHD

ＡＤＨＤ（注意欠陥多動性障害）とよばれる子どもの本人の視点から分かっていてもコントロールできない本人の気持ち、認められほめられて初めて落ち着けることなどを伝える絵本。

●B5／32頁／本体1,300円＋税
さとうとしなお・作　みやもとただお・絵

岩崎書店　〒112-0005東京都文京区水道1-9-2　TEL03(3812)9131
〔HP〕http://www.iwasakishoten.co.jp

今の成功につながるきっかけはお母さんがカンパしてくれた4ポンドで、それを通信費に当てて事業を起こしたのが始まりです。

「学校は悪夢だった」

ディスレクシアである彼にとっては学校で教科書の音読や暗記をさせられることは苦痛でした。

ふつうのIQテストはひどい結果がでるだけで彼の成功へ至るために内に秘めた情熱や志を測ることは出来ませんでした。一番大事な能力である人とのコミュニケーションを取る力や心と心で人とつながることが出来る力を見逃してしまいます。これらの力は人に力を与え志を夢の実現へのレベルまで引き上げるものです。

「第一歩」

皮肉なことに彼は青年期に規則で固められた学校にフラストレーションを抱いていました。彼は自分のエネルギーを学生新聞の発行につぎ込みます。それ自体は変わったことではないのですが、彼は一工夫していくつもの学校をつなげるような仕組みにしました。そして学校ではなく学生に焦点を当てました。広告を取り、大臣や映画俳優に登場してもらい成功させようというのが目標でした。1968年にビートルズのサージェント・ペパーのアルバムの表紙を描いたピーター・ブレイクの学生のイラストを表紙に発刊されました。

このとき彼の学校の校長は「君は刑務所で終わるか大金持ちになるかどちらかだね」と言って祝福したそうです。

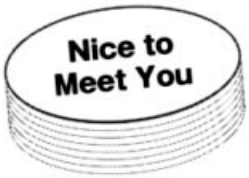
「成功の秘訣」

その後、レコードの価格統制の廃止を契機にレコード店の経営を始め、学生新聞の読者に宣伝して大成功を収めました。

ヴァージン・グループの会社はどれも小規模です。一人一人の社員のアイディアを大切にして独特の世界を築き上げています。「全ては人にかかっている」と彼はフォーブス社のインタビューで答えています。

参考

Richard Branson、Loosing My Virginity



2004年3月から8月末までにディスレクシアに関わるいろいろな方との出会いがありました

第6回BDA国際会議
ディスレクシア：症状から研究と実践へ
2004年3月27日から30日
英国ワーウィック大学

約900名が世界各国から参加して14の部会に分かれて会議が行われました。

日本からはDAISYを推進している河村宏先生が発表をされました。新しい分野として矯正するのではなくて、才能を発掘しようといった動きも出てきています。やっと全体像としてのディスレクシアが見えてきはじめたのだという感慨を持ちました。

ディナーのゲストはオリンピックで5回大会連続で金メダルをとったボートのレドグレーブ選手です。自分の苦労もさることながら3人いる子どもの真ん中の子がディスレクシアで下の子に追い越されて大変な思いをしている話や妻が理解をしていないので大変だという話をして大変親近感を感じました。

神戸国際ディスレクシア会議
日本語、中国語及び英語におけるディスレクシア
2004年4月18日から20日
理研脳科学総合研究センター / オクスフォード神戸セミナー合同国際シンポジウム

世界の名だたるディスレクシアの研究者が日本に集まりました。

一般向けのオープンデイに引き続き専門家を中心に神戸の六甲にあるオクスフォード大学神戸インスティチュートに缶詰になって、最新の研究と中国語や日本語といったアルファベット以外の文字を使用している国々におけるディスレクシアについて論議が重ねられました。

昼間の発表よりも夜の意見交換の時間が大変有意義でした。特に脳科学ということでこれまでは見ることの出来なかった世界へ目を向けることが出来ました。英語、カナ、漢字と文字によって認識するときに脳の働く部位が違うことも見え、これまで仮説でしか語られなかった分野に光りがあたってきたことを学ぶことが出来ました。

以前、「贅沢病だ」、「日本語ではディスレクシアはいない」等と言われたこともありました。近年ディスレクシアが科学的に説明できるようになり、さらに科学的対応方法が見出されることで、多くのディスレクシアの人たちが本来の能力を発揮できる手立てとなると思います。

第四回発達性ディスレクシア研究会
2004年8月26日
川崎

2001年にちょうどエッジが設立されたのと並行して筑波大学の宇野彰先生とクリニックかとうの加藤醇子先生が中心となられディスレクシアの研究会を開催しています。今回はIDA(International Dyslexia Association)副会長のチャールズ・W・ヘインズ先生(ボストン・マサチューセッツ総合病院健康科学部)が「ディスレクシア研究の最前線」についてお話になりました。遺伝的要因、神経学的要因、認知・行動的要因について話されました。また指導介入ということでアメリカのthe No Children Left Behind Actの法制化により効果の裏づけがある指導を読み書きにおいてすることが重視されるようになっています。音韻の法則を強調した上で、1）多感覚を用い（視覚＋聴覚＋触覚＋筋運動感覚）2）スモールステップで　3）連続的に（単純なものから複雑なものへ）4）成功体験をさせること　5）獲得したスキルが自動的に私用され汎化されるように復習し、らせん状に反復すること、というきわめて当たり前だけれども忘れがちな方法が提唱されています。

又これからの研究の方向性として学際的であること、知見の適用性を臨床家と研究者、親との連携を通して確認すること、様々な言語を見渡した研究を行うこととしています。

日本LD学会第13回大会
2004年8月27日から28日
成蹊大学
効果のある支援方法の探究

発達性ディスレクシア研究会に引き続き行われた日本LD学会ではチャールズ・W・ヘインズ先生が特別講演で「読み障害に対する指導方法の効果－米国における視点」と題してお話になりました。

前日の講演に加えてＩＤＡの前身であるオートン協会を作ったオートンとギリンハムの開発したフォニックスの指導法がいかにディスレクシアに効果があるかを説明、又マルチセンソリー（多感覚を使用した指導）がいかに効果的かをお話くださいました。全体の内容としてはより多方面に深く討議されていたことと、読み書きに関する部会が活発であったこと特別支援教育に関する地域の取り組みが印象的でした。

発達性ディスレクシア研究会にてヘインズ先生と

日本LD学会第十三回大会に参加して　成蹊大学

今までの日本では、LDの主症状であるディスレクシアに対する研究は、諸外国よりかなり遅れておりましたが、今年度東京の成蹊大学で行なわれました日本LD学会の大会では、ディスレクシアの研究が多く取り上げられる様になりました。また幼児期から高等教育までの特別支援についての報告も多く、近年飛躍的にLD/ディスレクシアの子供たちに対する理解も進みつつあります。

当学会で、ディスレクシアは通常学級にいる子達だろうと指摘する小中学校や教育委員会の先生方にも、多くお会いすることもできました。一方、AD/HDなど他の症状と重なりあっているディスレクシアの子供たちの研究はできても、ディスレクシア単体のみの特徴をもつ子供を見つけ出す事が難しいため比較研究ができないという話もありました。今後、ディスレクシア単体のみの特徴をもつ子供を多く見つけ出すことでその研究が盛んになれば、日本の多くのディスレクシアの子どもたちを救うことができるのではないでしょうか。そのためにもアセスメントの開発が急がれます。

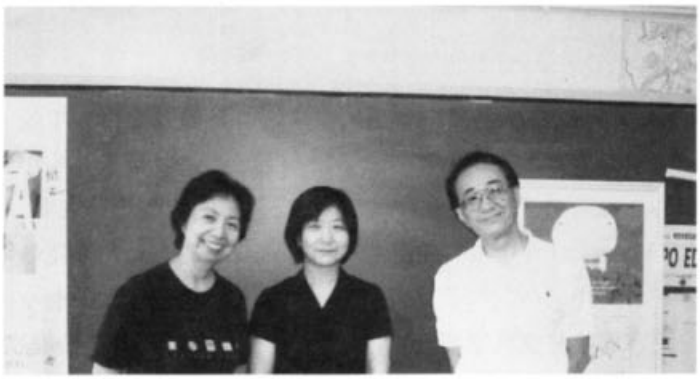
特別支援については、学校関係者だけでなく多くの方々の協力が得られている地域は、支援体制が飛躍的に確立されております。官民一体になって真剣に取り組まれている地域かどうかで、自治体間の支援体制の格差がさらにひらいて行きます。

臨時総会報告

7月24日（土）11：00～12：00 みなとNPOハウス4階EDGE事務所にて臨時総会が行われ下記の議案について、提案どおり承認されたことをご報告いたします。
事業報告・事業計画の詳細は、EDGEホームページにて公開する予定です。

会議の目的及び審議事項

第1号議案　2004年3月～7月　事業報告の件
第2号議案　2004年7月～2005年2月事業計画(案)の件
第3号議案　役員選任の件
第4号議案　定款一部変更の件



左から藤堂会長、緒方新理事、林新理事、EDGE事務局にて

就任新理事の略歴紹介

林　正紀氏　略歴

1975年3月　亜細亜大学法学部卒業
　　広告代理店、出版社、専門学校、学習塾勤務を経て
1995年より（株）東京個別指導学院に勤務　室長を歴任
2000年より　本部教務部にて学校渉外、不登校、学習障害を担当
2002年　NPO法人ライフカウンセラーサービス　認定カウンセラー取得
2004年　（株）ジェイテック日本トータルカウンセリングセンター設立代表取締役
　　（株）グロップ（家庭教師センター）　専属カウンセラー

緒方　明子氏　略歴

明治学院大学心理学部教授

筑波大学大学院博士課程心身障害学研究科修了、教育学博士
著書・論文：LD教育選書1・2・3（学研、1996）
　　学習につまずきのある子の地域サポート（川島書店、2001）教育臨床心理学（コレール社、2004）
所属学会：日本LD学会（常任理事）、日本特殊教育学会、
　　日本発達障害学会、日本行動療法学会
　　日本教育心理学会、日本SNE学会

意見交換会の報告

特別支援教育推進事業プレイベント

【テーマ】「すべての不利を被っている児・者のために」
～港区における特別支援教育のサポートについて考える～

7月24日13：30～15：30まで、みなとコミュニティハウスにて、本年度EDGEが行う港区との協働プロジェクト・特別支援教育推進事業のプレイベントとして、意見交換会を行いました。およそ30人の参加者で、活発な意見が交わされました。

まずそれぞれの分野の専門家から特別支援教育に関する話題提供をして頂き、その後、自由討論を行いました。

『現在、専門家の交流会や親同士の交流会は行われているが、当事者の交流がなかなか行われていない、当事者でないと分からないこともいろいろあるので今後は是非当事者間の交流を行いたい』（当事者）

『得意なものを引き上げると、周りのものが上がる力学が働きます。日本の教育現場は不得意をまずやりなさいと言いがちですが、かえって良いところまで、凹んでしまいます。』（カウンセラー）

『生徒それぞれの夢を大切にすることでやってきました。お母さん、お父さんが自分のお子さんのことを実はよくわかっていない。どこがよくて、それをどう訓練しなければならないか、子どものことを考えようとする親がかえって減っています。』（教師）

『いろいろ試してみましたが、おちつきがなく、困っていました。思い切って、学校を休み、彼が好きな三国志の舞台である中国に行った後、授業を抜け出すことがなくなりました。』（保護者）

『うちの子のことで相談したくても、相談できるところもないし、情報もなく、困っておりました。皆目なんにもない状況から、今日、この会に出していただいて、たいへん参考になりました。』（保護者）

など、さまざまな活発な意見が出る場になり、大変有意義になったと感じます。今回は、様々な専門家や親子での参加者、そして今まで全く関わりを持っていなかった方など、様々な人との意見を交換が出来、それぞれの参加者の違ったニーズを聞くことが出来ました。

詳しくは、EDGEホームページにて報告を致します。

EDGEは、本年度は港区との協働で特別支援教育に取り組みますが、それぞれの立場について理解しながらお互いのニーズを満たさなくてはいけないという大変さを感じながらも、最後には皆さんがとてもこの場を楽しんでいらしたのを見て、ますますプロジェクトについての意義とやりがいを感じました。協働の結果は、この場にいらした方や会場に残念ながらいらっしゃることが出来なかった会員様にも是非お知らせしたいと思っております。最後に、今回はこういう機会を作りましたが、いつでも皆様の意見をお待ちしておりますのでお気軽に仰って下さい。

港区ＮＰＯ活動助成事業

特別支援教育を推進するための仕組み作り
ボランティア養成講座、啓発活動
特定非営利活動法人テクノシップと
エッジの二つのＮＰＯ協働による申請事業

港区には約7200名の小学校、中学校に通う児童生徒がいます。国が特別支援教育を推進する事業に取り掛かっていますが今回港区では区の保健福祉部、教育委員会と社会福祉協議会そして明治学院大学の専門家にご協力を頂いて二つのＮＰＯが協働して港区における特別支援教育の推進をしていくことになり、このたび区のパートナーズ基金から助成を受けました。

テクノシップにとっては2年連続しての申請です。昨年度は発達障害者の支援が出来るボランティア講座を開設し70名以上が修了しました。今年は講座修了をしたボランティアが効果的に動けるように、又特別支援教育の観点からひとりの人間を支えるのにエリアネットワークが不可欠であることから、まず仕組みづくりにも取り組むこととなりました。

「エッジの役割」

この協働の中でエッジの役割は仕組み作りに参画することとＬＤ／ディスレクシア、ＡＤＨＤや高機能自閉症など通常学級で1クラスに一人二人はいるであろうといわれ、外から見ただけではよく何が問題なのかわからない子どもたちや人たちについての啓発を港区内の子どもと関わる方たちに進めていくことです。

既に7月14日の総会のあと「特別支援教育推進事業プレイベント」として意見交換会をしました。（4ページ）

「テクノシップのボランティア講座」

テクノシップのボランティア講座もはじまっています。今年は連続4回で「あなたも特別支援教育の担い手になれる！」あなたの支援を必要としている子どもたちや青年がいます

生涯にわたる支援とは－幼児期、学齢期、青年期以降における、それぞれのライフステージでの支援の方法を学び、”共に輝いて自分らしく生きるために”と題して講座が開かれています。

8月の後半に昨年のボランティア講座修了者を対象にデイキャンプでのアテンドを経験してもらい9月からの講座の第1回は開講に当たってボランティア体験についての発表がありました。

この後10月3日、11月14日、2005年1月23日にそれぞれ幼児期の現状と支援について、学齢期の現状と支援について、青年期以降の現状と支援についての講座が行われます。

「特別支援教育の仕組み作り検討委員会」

生涯にわたる支援を地域と行政が一団となって推進していくためには従来の仕組みでは対応しきれません。

ボランティアの効果的な活用にとどまらず、教師もどのように対応したらよいかわからない、保護者も何が問題なのかどうしたらよいのか悩んでいる、そして何よりも本人が本来の能力を発揮できずに戸惑っている。

そのような状況に少しでも対応できるよう港区の特色を生かしての独特な先進的な取り組みを考えていこうという目的で検討委員会を設けました。区の保健福祉部、教育委員会、明治学院大学、社会福祉協議会、テクノシップ、エッジをメンバーとしてこれまで2回行われました。第1回はそれぞれの団体の現状と課題について、第2回はそれぞれの団体のニーズについて話し合われました。

第3回はケーススタディーとして地域でのネットワークの取り組みが始まっている滋賀県の甲西町を取り上げることと港区内の特別支援教育に関連するリソースの洗い出しの作業を致します。

この仕組み作り検討委員会では3月を目処に政策提案をして発表会（3月9日麻布区民センターにて）をする予定でいます。

テクノシップ・デイキャンプより

ディスレクシア関連の動き

◇政策

特別支援教育に関する要望書提出

全国LD親の会、NPO法人えじそんくらぶ、自閉症協会とエッジは7月にそれぞれ特別支援教育の推進に向けての要望書を文部科学大臣に提出しました。それに対して文部科学省より9月7日に回答を頂きました。

より細やかで生涯を通しての支援を推進するために具体的な政策とスケジュール、又その裏づけとなる予算の確保を切に願います。

要望事項は

1．－特別支援教室の設置の早期実現
　－特別支援教室の教室設置、教員配置の安定性確保
　－特別支援教室について多様なニーズに対応可能な仕組みとすること
　－特別支援教室のモデル事業ないし緩急開発学校での試行（17～18年度予算要望）
2．特別支援教育への転換に必要な法令の改訂とスケジュールの明確化
3．特別支援教育推進体制モデル事業の拡充実施
4．文部科学省における特別支援教育への取り組み体制の拡充
（全文 http://www.npo-edge.jp）

これに対して文部科学省からはモデル事業ではなく推進事業と名称も変えて拡充していく方針であること、これまでは小学校と中学校が対象であったものを幼稚園と高等学校に拡充すること、文部科学省内での取り組み体制の拡充に関して前向きな説明がありました。法令の改訂とスケジュールの明確化に関してはまだ明確ではない部分もありました。

特別支援教育に関して色々な団体が足並みをそろえて要望書を提出することが出来たのは意味がありました。

◇メディア

ディスレクシアというコトバが広く知られるようになることはうれしいことです。

8月にNHKのETV特集、9月には読売新聞の科学面で取り上げられました。

NHK教育テレビETV特集「読み書きの苦手を超えて」

8月21日（土）にNHK教育テレビで『読み書きの苦手を超えて』というディスレクシアに関する番組が放送されました。番組の中ではイギリスは良くて日本では何にも支援がないとの印象を受ける場面がいくつかありましたが、現実は日本でも確実に支援の動きは広がっています。また英国の私立学校と日本の公立学校を比較するなど無理やり取材した感が否めませんでした。（※この番組の内容にはエッジは一切関わっていないのでその点をご了解下さい）

内容では誤解を招きそうな表現が色々とあり、取材方法にも人の心の痛みに配慮がない部分が見受けられました。せっかく90分という枠があったのに残念でした。

特に気になった点は

1）障害という表現を少なくとも10回は使っていたこと

ディスレクシアは読み書きに困難があります。しかしこれは例えば音痴であるとか近視であるとかと似ていて他の能力はあるのに特定な部分で不便があるのです。近視の人に遠視のめがねをつけてよく見ろといっても見えないように、読み書きがつらいのなら聞かせてあげる、体験させてあげるなどいろいろな方法があります。読み書きが出来ないと日本ではまだまだ学問の入り口と出口が狭くなってしまっているのが問題なのだと思います。

2）検査をしてよかった

ディスレクシアかどうかの検査をしても学校の先生が理解をしていなかったり、保護者がきちんと理解していないとただラベルを貼るだけになってしまいます。また、日本語でディスレクシアの標準化された検査はありませんし、できる先生も数限られています。放送で流された検査はただの知能テストの一部であり、それもディスレクシアかどうかを見極めることに役立つものでもありません。それよりもひとりひとりに備わった能力を発揮できるような配慮が必要です。

3）関西ではないのですか？というお問い合わせがありましたが関西では神戸の西宮ＹＭＣＡがディスレクシアに対応しています。また、大阪医大にあるＬＤセンターも対応しています。

4）一生付き合っていかなくてはならない

発達性と番組の中で言っていましたがこれは悪くなっていくということではなく、子どもは発達して成長していくという意味です。ですから今、読み書きに興味がなくてもきちんとした対応をして自分の興味や好きな課目に関しては読めるようになることもありますし、思春期になって霧が晴れるようにはっきりとすることもあります。一生付き合っていかなくてはならないというネガティブなことを考えるのではなく、本来の能力を発揮できるようにするにはどのようにしたらよいのかという視点を忘れずに、お子さん、または部下のよいところを見つけて伸ばしてあげるようにしてください。強い部分を生かして営業やデザイン、建築家、秘書を雇っての企業家などいろいろな活躍の方面があります。ぜひ、よい面を生かしてあげて下さい。

読売新聞　9月15日（水）科学欄

サイエンス『実は多い？読み書き障害－ディスレクシア　知的問題ないのに／「練習不足と」と誤解－支援遅れる日本』

4月に神戸で行われた国際ディスレクシア会議に参加していた読売の片山記者がディスレクシアについて「脳科学」の研究成果などを踏まえての取材をしてくれました。近頃はｆ MRI（機能的磁気共鳴画像装置）や光トポグラフィーなどを使って脳の機能のなぞが少しずつ解明され始めています。日本語の特性であるカナと漢字は読むときに脳のどこの部分が刺激をうけて、英語とどう違うのか、習ったばかりの時と慣れたときには脳のどこの部分が働いているのかなどがわかります。

科学的な成果を元により効果的な対応方法がとられるようになって来ました。

メンバーの活動

■ワークショップ in 東京

ディスレクシアの子供たちのためのクラスルーム アシスタントの資格を取った時、「子供に何をしてあげたらいいのか」、と担任や父兄に聞かれたら「自信をつけさせ、自己評価を上げることです。」と答えましょう、と教えられました。

そう言うのは簡単ですが、実際に、どうやって自信をつけさせ、自己評価をあげたらいいのか、が問題です。

自信とか、自己評価という言葉に不慣れな日本人にとって、始めの一歩は自分を好きになることです。私がイギリスで使っていて、楽しくて効果のある方法を日本の子供たちにも使ってほしいと思い立ち、ワークショップを計画しました。子供たちに「自信をもて」「自分を好きになろう」と言う前に、自分自身が自信を持ち、自分を好きになってほしいと思い、今回は大人を対象にしました。

8月の暑い日に集まってくださったのは大学生から80歳までの13人。「自分がディスレクシアだ」という人、「子供が」という人、指導者、先生、そして全然ディスレクシアには関係ないけれど自信をつけたいという人、いろいろでした。誰にでも、得意なもの、良いところがたくさんあります。謙遜の美徳の日本人は足りないところ、出来ないことに目を向けることが多いようですが、「問題かな？」と思うところも見方によっては充分、長所に見えてくるものです。ワークショップでも大きな紙に得意なこと、自分の長所のつまった缶詰を書きながら、皆さんの顔がほころぶのを見て嬉しく思いました。

色わけをして、英語のスペリングと漢字を、絵のように覚える方法も紹介しました。オックスフォード大学の博士過程で脳とディスレクシアの関係を研究中の参加者が、脳の働き方からみて、とても良い方法だと言ってくれて、私の自信も高まりました。

小さなワークショップでしたが、始めの1歩です。

日本中の先生とお母さんに体験してもらってディスレクシアの子供たちに自信をつけてほしい、というのは大きすぎる夢でしょうか？

（ロンドン在住　館野千恵子）

■デイジー（DAISY）体験会 in 名古屋

8月27日に名古屋伏見ライフプラザにて、『デイジー体験会』を開催しました。当日は（財）日本障害者リハビリテーション協会の吉広さんより、デイジーと他の録音図書との違いや、使い勝手のよさの説明を受けました。

その後、参加者自身が、パソコンを操作してデイジーを体験しました。

デジタル編集協議会「ひなぎく」の中村さんから、小中学生の皆さんが、実際に使っているデイジー化されたマルチメディア教科書の紹介をしていただきました。

特別参加の国立身体障害者リハビリテーションセンター障害福祉研究部長の河村宏さんから、海外のディスレクシアにデイジーが普及している様子、著作権法の話、米国で教科書のデイジー化が義務付けられようとしている話、日本では、災害マニュアルのデイジー化を進めている話等、熱く語っていただきました。

話を聞いた後、参加者の皆さんからは、すぐにもデイジー化された教科書が欲しいという声が出ました。すぐに、自分たちで制作するのは無理です。やはり、今は「ひなぎく」に相談するのが良いと思います。今回の皆さんの反応をみて、まだデイジーのことを知らないディスレクシアでも、これも直接見たらすぐに欲しくなるのでは、と思いました。今は、制作できるところが少ないのです。それだからこそ、デイジーを多くの人に知ってもらって必要だという声をあげてもらいたい。それによって、製作者が足りないとか著作権法の問題とかが解決されてゆくはずです。

体験会で強く印象に残ったのは、中学校の先生の話です。三名のディスレクシアだと思われる子どもたちに、国語を教えているそうです。今まで参加した講演会には具体的な勉強方を示してくれたものはなかったそうです。マルチメディア教科書をみて「これだ！」と思ったとのことで、「今日参加して良かった、大当たりだ」と言ってくださいました。

今回は多くの人に協力をいただき良い会が出来たという満足感と同時に、ディスレクシアへの具体的な支援がとても少ないということを思い知らされた一日でした。

体験会での色々の思いを次の活動につなげたい、そしてまた報告できればと思いました。

（名古屋在住　杉村　明美）

『関連ホームページ』

デイジー　http://www.dinf.ne.jp　ひなぎく http://www.daisy.gr.jp　奈良 DAISY の会 http://www.gsk.org

エルトン・ジョン、アン王女、アンドレ・アガシ、その他多くのセレブリティたちを魅了する

英国のベストセラーアーティスト、マッケンジー・ソープがBunkamuraにやってくる！

<ほんの小さなきっかけで、子どもたちに大きな未来を>

マッケンジー・ソープ来日展は、～ほんの小さなきっかけで、子どもたちに大きな未来を～を合言葉に、さまざまな困難を抱える子どもたちが輝かしい未来を築いていくための「きっかけ作り」をサポートする運動、『愛をはこぶ人キャンペーン』が主催となって行うキャンペーン活動です。ソープ氏が、彼の叔父からプレゼントしてもらった画材が「きっかけ」となり絵才能が花開いたように、同じようにちょっとした「きっかけ」を子どもたちに提供することにより、子どもたちが明るい未来を獲得できるよう支援することを目指しています。是非みなさんの参加をお待ちしています。

日本向けの版画作品「ハッピー」

絵画展：2004年11月12日(金)～11月23日(火・祝)入場無料

レセプション：11/12（金）

マッケンジー・ソープ氏トークイベント：11月14日(日)予定

ワークショップ：大人向け11月12日（金）14：00～
アカデミーヒルズ（六本木ヒルズ）
：子ども向け11月14日（日）10：00～
みなとNPOハウス

子供向けワークショップは、EDGE会員の方やニュースレター読者の方を優先的にご招待いたします。是非EDGE事務局にお問い合わせ下さい。

2004年3月～2004年9月活動報告

4月18日（日）～20日（火）	神戸インスティテュート「ディスレクシア国際会議」
7月24日（土）	臨時総会
	意見交換会「港区における特別支援教育のサポートについて考える」
8月24日（火）	学校で出来るボランティア講座
8月26日（木）	第4回発達性ディスレクシア研究会
8月27日（金）～29日（日）	第13回日本LD学会（成蹊大学にて）
9月9日（木）	NPO事業サポートセンターより研修生（6名受け入れ）

今後の予定　2004年10月～2005年3月

10月30日（土）	3世代交流子どもNPOメッセ参加
11月2日（火）～6日（土）	International Dyslexia Association In Philadelphia
11月10日（水）	講演会　川崎市立犬蔵小学校にて
11月12日（金）～23日（火）	マッケンジー・ソープ来日絵画展
12月4日（土）	LD疑似体験講座　品川区立大原小学校にて
2005年3月9日（水）	特別支援教育推進事業報告会＆シンポジウム

みるみるわかる！英語塾

学校では教えてくれない
身に付く英語の学習方法を
丁寧にわかりやすく少人数で指導します。
中学校・高等学校のスタートラインで
『出来る』楽しみを味わいましょう。

A! A?

NPO－EDGEがはじめる「LD・ディスレクシア」向けの英語塾

『みるみるわかる！英語塾』の特徴

1　フォニックスを使った効果的な学習
オートン・ギリングハム（Orton-Gillingham）による、フォニックスの指導法は、読み・綴り・書きの習得について多感覚（視覚・聴覚・触覚・運動統合感覚）を使って行うアプローチです。

2　少人数でのわかりやすい指導
ひとりひとりの理解度にあわせて、きめの細かい指導をいたします。
発音や読みだけではなく、文法や文の構造も学習し学校での学習のサポートもいたします。

3　LD・ディスレクシアのお子さんも楽しく学習できます
EDGEが培ってきたディスレクシア（読み書き困難）のノウハウと、LD・ディスレクシア児に対する指導実績を持った先生が指導にあたります。

詳しくは、ホームページ
（http://www.npo-edge.jp）をご覧下さい

EDGEで販売しています
「怠けてなんかない！」
1,365円（税込）
品川裕秀著　岩崎書店
マッケンジー・ソープ　絵葉書セット
600円（8枚）

Report from the EDGE - 第6号 -
2004年9月30日発行
発行者　NPO法人EDGE
発行責任者　藤堂栄子　東京都港区六本木4-7-14
みなとNPOハウス4F
Tel.03-5413-3356　Fax.:03-5413-3358
編集　NPO法人EDGE事務局
印刷　株式会社　信英堂
http://www.npo-edge.jp
info@npo-edge.jp